



15, Dec, '69

Ed: Kou WUKAI
354, Kameyama, HIMEZI

通信

昭和44年12月5日発行

通号 83-N-16

姫路市かめ山354
イオム同盟会

いまのごろの意味

ふと、駅通りを歩いていて、京都から帰っている学生に出逢った。「一体どうしたらよいのか、わからへん。」という。10・21から11・17にかけての佐藤訪米阻止斗争が与えた坐折と沈滞感、暗く重たいものとして、七の年代斗争の展望とどしたかのように見える。「どうしたらええかわかれへんかったら、しばらくじつとしてたらええやないか。じつとしておれんようにきつとなる。それがなつとくできなかつたら、自分自身として、一から白紙で、やれることをやる。一人でも出来ぬ小さな何かをみつつけてやる、という立場をまずはつくりすること。」と答えた。

「ぼくはしきりに想起する——今から10年前、あの大品場のあと、安保改悪に終った六〇年の当時において、一体だれが、バトナム反戦や大学斗争、全共斗の運動を予測しえただろうか。」

どのような風でも、強く弱く渡うつて吹く。

斗いが長い運動であるがぎり、高揚と低滞がある。

いまの沈滞は、ある意味で新しい斗いをつくりあげるために必要な休止であり、歴史における波面である。

やがて再び力みちてよりあがるとき、自分はどうするか。そのことによつて「いまのごろ」の意味があきらかになる。

ミイラとりのミイラ...

いま、今日、きびしくとりわけ向われているのは、「権力」の問題である。つまり経済の成長や、所有制度の愛護で、この問題が解決しないということは資本主義、社会主義の既往の体制が、事実をもつて証明している。

そしていまぼくらの眼前にあらわれている敵は、まさに「権力」である。それゆえぼくらのあらゆる面での斗いは、「権力」その組織としての「暴力機構」と対峙するものとしてある。それゆえエスカレート

①「現代暴力論——非暴力直接行動の意味」といつた小論文を四五日前から書き出した。裏の手帖その他に今書きいたもののうち約セーハ〇枚を抄出して、あと五・六〇枚書き足して...と考えている。できれば一日中にまとめて、川をパンフにしたい。自連社の資金を、それでつくりたい？。

した状況の微視的相対化は、政治的な権力・前征の創出を目的化したり、「軍事的な暴力斗争の絶対化」によつて、多分に「みいらとりのミイラ」と化すおそれを経験している。

ぼくらの斗いは、「いろんを斗い方を統一する」という形での「権力的な集中による力」で、権力に対峙するものではないこと。暴力に対して暴力で、ではなく暴力でない力で対抗するものであること、をいま改めて確認しておこう。

② ② ② ② ② ② ② ② ② ② ② ② ② ② ② ②

負けることをサボる

佐藤訪米—沖繩返還共同声明—総選挙への持込めによる有無を云々せぬ「権力側の決定的な勝利の確認」という予定のコースが、ぼくらの眼前でくりひろげられている。

総選挙の結果——つまり自民党勝利——だから佐藤訪米の成果を国民は支持している——は、沖繩のなれ合い返還と安保自動延長という七の年代自民体制の「不動図」と、反体制側への「追い専ら」のためには、絶対不可缺のものなのだ。

つまりぼくらにとつて総選挙の一票は、「敵の勝利の手続き」をより完璧化し、自分を敗北へとおとし込む仕事を果すという以外の何者でもない。

にもかゝらず、お人好しのぼくらは、又もやせめてもと、革新へ一票を投ずる茶番を演じようとしているのではないか。たとえ自分の一票が革新の代議士を助けたとしても「選挙のもたらす本質的意味は佐藤らにとつて同じこと」とすれば、まさにそのこと自体が、政府の手先きとしての意味をもつ。

投票にいくなら、他にすることはいくらでもある。なかつたら、仕事をサボつて家でねこうんでおけ。

国会選挙—代議制とは、敵がつくつたルールと敵に都合のよい土俵のワケで、スモウをとることだ。そのルールや土俵をやることを前提にして、どうしてぼくらが勝つことができるのか。バカバカしいことだ。

救援といふこと。

「斗う者が他者の救援を、全く自己のものとする」となした、それは眞の斗うものたりえないだろう。という意味をうかつと前号イオムにかいたが、それは「助ける」「助けられる」という双方の一次的な相対化を、二次的な「救援が行動として深化される」ことにおいて、双方を二体化するということである。

そして、救援者すなわち被救援者であり、斗う者すなわち救援者である、このより深められた意味と視点を、更迭的、交替的に把握体得するみちは、まさに救援活動を自ら実践すること以外にない。

一休化とは、現状としてある二者の乖離―おれは斗っているから、そこまで手がまわらない。よろしくたのむという立場と、救援をせめての活動とする―犯罪者の立場を、異なる関係として―ブーバーのいう「われとなんじ」として正しく対峙させることである。

斗いと同じ意味において、あらゆる力をつくして、救援を自らのものとしよう。

またまた「あなたの清い一票を あやまりなく行使しましょう」といつたキャンパーンが鳴り出した。

「清い一票」とは一体どんなことか。たとえばどんなに行使者側で清く投じられようとも、それが代議制の「手続さ」―政治家の選出にしかすぎず―汚ない体制と汚ない政治の合目性へおまたちが選んだ代表じやないか」となる以上、「汚ない一票」でしかない。君が、かつて今迄投じた清い一票が、たとそ一度でも清い結果をつくり出したことがあるか。今どの選挙でその可能なことを確信できるか。

もし、そうでないとならば、「投票」という仕組まれた「手続さ」が、根本からまちがっていた、ということにならないか。

「清い一票」は、投じた瞬間から汚ないよごれた性格のものとしてしまう。そのことを考へずして、清い一票そのものに幻想を与えようとするキャンパーンが意味する人民への犯罪性は、あまりにもはつきりしている。きみは、汚い一票を投じて汚ない政治の加担者と、又もやなろうとするのか。それとも「反投票行動」へと自らを立ち上げせるか。

賀状を、ことしきどへも出さずに失礼をします。この紙面をかりて、月並ながら、この一年の御厚護にお礼を申し上げます。 69年12月6日

視座と視座

ぼくらの世界は、眼の長さ、ふつう一メートルの「カセン」位を中心にはろがつている。たとえば家を電柱もポストも看板も、前から歩いてくる人も、その眼の高さにおいてとらえられた構図としておさまっている。―ある時、大型トラックの高い運転台に同乗して走った。いつもみられた又又奥のうづきがまるであらうのにおどろいた。―

としてみると、ビルの屋上からみる足許の風景がものめずらしいように、もしぼくが雪つく大入道だつたら、いまぼくが抱いている世界像は、まったく同じでないだろう。いまぼくは週に一回大入道へ出かける。そして梅田地下道をとおりすぎるとき、その地下道に坐つたり腹ばつてゐる物々しい男をいつもみかけるのだが、その彼の地上十ぬセンチの視座から、どんな世界を見出しているだろうか。いわんや（極端に言えば）ぼくと全く感情や立場を異にする大や猫、ねずみの世界はどんなだろう。

（このようにぼくらは眼の移動だけでも、その世界を一変して認識する。とすれば、眼だけでなくその他のいろいろの条件をも加えた自己の視座そのものの確認と客観化から、正しい認識を求めていく「姿勢」が、まず第一番の課題であろう。）

一つの肉体的絶対状況とその認識を打開するということは、ある意味で自己の視座をうごかすこと、と関連している。つまり眼の位置を移動させること。

ないかえれば、視座は「行動」にともなつてうごく。「行動」が視座をかえるのである。

視座の移動は、認識の転換をもたらす。そこから新しい視野の展望と、新しい「行動」の視座が生れてくる。

その新しい視座は、肉体的絶対状況を切開する行動の起原である。

雑記

④ イオム前号は、自連と同時できなかったのが、ごく一部のみにしかわたっていない。もしみたいがければ、お申出下さい。お送りします。